

たくみ

Craftsmanship

特集 第十三回島岡達三師弟展
特集 芹沢銈介の型染カレンダー

第34号

暦と二十四節気のこと

暦の上での季節感、つまり立春から大寒にいたる二十四節気を、この頃実感することがあまりない。しかし先日、八月二十三日の新聞のコラムやテレビで、今日は暦では“処暑”。涼風が吹き暑さもそろそろおさまりはじめるでしょう、ということであった。

処暑、とは聞きなれない言葉だが、その日の夕方、湘南の拙宅前の路地の海側から山へ吹く風が爽やかで、これが処暑の涼風か、と感じた。

ところでわが国では古代より、中国より伝えられた太陰暦を用いてきた。日本書紀に、持統天皇四年(六九〇)はじめて儀鳳暦ぎぼうれきを行う、と記されているのがそれである。

太陰暦というのは、月の運行を基にして作った暦だから、日付が太陽の位置とは無関係である。そこで春夏秋冬の循環による暖、暑、涼、寒の往来にズレを生じたのであった。

そこでそれを修正するために日付とは別に季節区分法が必要となり、一期を約十五日、一年を二十四期に分け、夫々の節気を配置して一ケ年の気候の推移を知るようにしたものである。

因みにその二十四節気を旧暦の正月から記そう。立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨、立夏、小満、芒種、夏至、小暑、大暑、立秋、処暑、白露、秋分、寒露、霜降、立冬、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒。

もとよりこうした節気は気候風土に基づくものだから、国や民族や地方によつて異なり、日本でも北国や、南国の沖繩などでは公用暦の伊勢暦や、東海地方の三島暦では当てはまらなかったのだろう。

民衆に暦が普及したのは江戸時代だが、明治六年一月に太陽暦に改暦されてからも、陰暦による地方固有の暦は、東北地方の南部絵暦や沖繩うるかの砂川暦など作り続けられてきたのである。

(志賀直邦)

たくみ企画展

第十三回島岡達三師弟展

会期 平成十九年九月二十二日(土)～二十七日(木)

九月二十三日(日秋分の日)、二十四(月振替休日)は
営業いたしません。

会場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで

(日祝日・最終日は十七時半まで)

出品者 島岡達三 土屋典康 松崎健 島岡龍太 五十嵐俊樹

宮嶋正行 明賀孝和 浜田英峰 福田るい 川上眞悟

前山幸弘 岡田崇人 島岡桂 塚田広幸 笠原良子

師弟展の愉しさ

二年に一度の師弟展の愉しさは、会
のたびに島岡窯の新しい卒業生が一人
か二人加わって彩りをそえることであ

る。第一回展は昭和五十六年(一
九八一)で、その時は島岡先生と、当
時三十代の気鋭の弟子土屋典康、松崎
健の三人展であった。

師弟展も回を重ねると、先生も来客

も出品者のバラエティを楽しまれるよ
うになった。平成五年の第五回展は、
弟子たちのほか、賛助出品として一門
の筆谷等(版画)、筆谷淑子(ガラス)
や松崎融(木漆工)も参加、さらに島
岡窯の職方や内弟子らも顔をそろえ、
名実ともに一門師弟展となった。案内
状に先生は、十七人の会、と記された。

今回は塚田広幸、笠原良子の両君が
新たに参加して、弟子たちだけで十四
人の出品となる。島岡先生は前回の揆
揆にもこう書かれている。「夫々が自
分の作風の確立を目指して努力してい
る姿は、師である私にとつては、何よ
りもうれしくて楽しみである。」

先生にとつて二年に一度の師弟展
は、各地で制作に励む弟子たちのその
後の研鑽と生長の姿を見届ける、また
とない場であり楽しみみなひと時なのだ
と思う。私たちもまた大きな期待を寄
せるのである。

たくみ 志賀直邦



灰被窯変湯呑 志埜湯呑 松崎 健



白釉縄文象嵌六寸組皿 島岡達三



地釉象嵌鉢 五十嵐俊樹



象嵌角皿 島岡龍太



白磁筒描湯呑二種 土屋典康

出品作家陶歴素描

島岡 達三 一九一九年生 栃木県益子町

濱田庄司に師事 人間国宝

土屋 典康 一九四五年生 静岡県下田市

国画协会会员

松崎 健 一九五〇年生 栃木県益子町

国画协会会员

島岡 龍太 一九五二年生 栃木県益子町

合田好道に師事

五十嵐俊樹 一九五〇年生 群馬県榛名町

国画协会会员



しのぎボウル 福田るい



掛合釉ジャグ 宮嶋正行



扇皿 川上真悟



緋襷急須 明賀孝和

川上	福田	浜田	明賀	宮嶋
真悟	るい	英峰	孝和	正行
一九五八年生	一九六四年生	一九五五年生	一九五九年生	一九五三年生
栃木県茂木町	日本民藝館展入選	日本民藝館展入選	千葉県大多喜町	栃木県茂木町
	熊本県荒尾市			国展、日本民藝館展入選



象嵌赤絵手付鉢 浜田英峰



地釉指描コーヒー碗皿 塚田広幸



流文酒器 前山幸弘



地釉筒描蓋物 笠原良子



鉄砂釉鎬水注 岡田崇人

笠原 良子 一九七六年生 栃木県茂木町	塚田 広幸 一九六五年生 栃木県茂木町	島岡 桂 一九七八年生 栃木県益子町	岡田 崇人 一九七四年生 栃木県益子町 国展入選	前山 幸弘 一九七一年生 長野県上田市 日本民藝館展入選
------------------------------	------------------------------	-----------------------------	--------------------------------------	--



櫛目扁壺 島岡桂

芹沢銈介の型染カレンダーと「東西の暦」考(一)

志賀 直邦

カレンダー刊行の背景について

芹沢銈介による型染カレンダーの制作が始められたのは、太平洋戦争の終戦後間もない一九四五年(昭和二〇)の晩秋の頃であった。その年九月、銀座のたくみも再開し、連合軍による占領のさなかながら、復興と新しい創造への息吹が感じられる時代であった。



第一回1946年度版 表紙

芹沢への型染カレンダー制作への提案は、当時のたくみの責任者であった山本正三からと記録されているが、それはむしろ時代の要請でもあったのだと思う。駒場の日本民藝館もその頃柳宗悦館長を訪ねる外国人がふえてきていた。そしてその関係もあつて、戦後復興期のたくみを支えたかなりの部分

が、進駐軍や駐日公館の人たちの日本文化への旺盛な好奇心と購買力だったのではないかと思う。

芹沢は終戦のわずか四ヶ月前、空襲によって家財、工房の一切を失い仮住いの身であったが、仕事の再興には意欲的であった。その時期の芹沢の仕事ぶりなどを、芹沢と柳悦孝の対談(芹沢銈介全集

月報)からみてみよう。

柳 その頃、型染のカレンダーを作ったでしょう。今も毎年作っていただけるあの型染カレンダーですね。

芹沢 そうです。布の型染は場所や道具が揃わないし、和紙ならなんとか手に入れることが出来たので、いきおい染と和紙が結びついたのですね。カレンダーを初めとしてカード、ポスターなど作りましたね。画帖も作りましたよ。「沖繩風物」などの頒布会もそれでやりました。

柳 うちの子供が、カレンダーの水元(水洗い)のたらいの中を棒で引っかき回したり、カテキュウの煎汁に足をつつこんだり、いろいろさぞご迷惑だったと思っております。

食べる物もそうですが、物そのものが極端に不足していて、ほんとにあの頃はなんでもよくこしらえたものでしたねえ。

芹沢 われわれは悦孝さんのその頃の仕事を焼け跡工藝などといっています



1946年11月



1946年12月

だが、作られた中でも私の居る離れに入る木戸の仕掛けは傑作でしたね。その木戸をくぐって多くの人が出入りしましたね。大きな外人、キーキやミルクをささげてくるアメリカ婦人、染色志望の美人連……。仕事が数ものになってきたので、学校の先生や画家や、またアルバイトの人達や、実にいろいろな方々の加勢と好意を受けましたね。

芹沢の型染カレンダーの製作は、布地に染めるのと基本的に変わらない手法で作られた。下絵を描き、型紙に彫

り、和紙に型紙をおいて糊伏せをし、さらに何色かの染料で色差しをし、水元をして糊を落として仕上げる。たいへんに手間のかかる仕事であった。

それにこのカレンダーは各月一枚で計十二枚、表紙も含めると一部十三枚の手染めの品である。また一九四六年度版の第一回目からの数年間はバラ売りであつて、制作も毎月の仕事だったから部数が増えるにつれて萌木会の会員をはじめ、多くの人たちの応援を受けた。

そして芹沢による和紙に型染をほど

こすという、カレンダー、カード、うちわ、扇子、蔵書票そのほかの、新しい和紙の民藝の量産の仕事は、その後一九五五年（昭和三〇）に大田区蒲田の自邸内に、量産のための工房、芹沢染紙研究所が発足したことによつてようやく軌道にのることとなった。

芹沢版カレンダーの特質について

芹沢銈介の三八年度分に及ぶ創作カレンダーの圖案の中で、やはり第一回の一九四六年度版がその創造性におい



1971年1月(ヤナセの社名入り)

て、そして七曜表としての様式の確立において特筆すべきものと思う。

まずその表紙は「七曜表 1946」と大きく装飾文字で描かれている。芹沢版暦に共通するデザインは総じて西洋の聖書や、グレゴリア聖歌などの楽譜に代表される中世筆写本の装飾文字(カリグラフィ)を連想させるが、終戦直後の「一九四六年度版七曜表」の全十三葉を見ても、それが西洋の模倣ではなく、まさに芹沢版和様カリグラフィであることに気付く。

各葉の月名も、和数字の大文字が季節の風物の模様上手くとけこんで、誇張にならない美しさをかもし出している。それと四六年度版だけは、曜日の表示が漢字のみであることから、この年の頒布対象が主として日本人であったと想像されるのである。

一九四七年度版からは、月名も、曜日の表示も、いずれも和、英の両方が図案化して採用されている。表紙は、一九四八年度版から「CALENDAR 1948」とデザインされたようだ。

この頃から芹沢版カレンダーは外国人バイヤーの手によって、世界各国に輸出されるようになった。たぐみからも外国車の販売で知られる「ヤナセ」を通じて、実に五十余年間にわたって海外に送られているが、ヤナセの役員の方の話では、やめるにやめられないほど人気が高い、ということであった。

ところで暦の七曜表の構成については、西洋の暦では曜日の表示を最上段に横一列というのと、左側に縦一列の二通りがあるようだ。芹沢の場合には英文だけを上段に、あるいは英、和を上下段に別けて表示する方法をとっている。

もうひとつ、文字の様式についていえば、一見多様に見えるが、とくに初期のものは月名、曜日、数字のいずれもがカリグラフィのイタリック体に近い。少なくともゴシック体は用いていない。それよりも浄土真宗の「色紙和讃」とまではいわないが、日本の伝統的な木版本の文字を念頭に置いた字体的ようにも思える。やはり基調としては和様であり芹沢的なのである。

芹沢の絵暦の三十八年間に及ぶその図案と構成の多彩さは驚嘆のほかはないが、さらに付け加えれば各年度のモチーフの面白さである。

たとえば一九四七年度の作は全十二カ月が童話シリーズである。一月から



1974年7月(童話シリーズ)

なお次号において、世界の暦の成立の事情や、日本における古代からの暦の受容の変遷、また広く頒布、愛用された頒暦としての宣明暦や伊勢暦、三島暦、南部や琉球の絵暦のこと、また明治維新後における太陽暦の採用のことなどを書いてみたい。

(つづく)

天の羽衣、鴨とり権兵衛、一寸法師、花咲じじい、足柄山の金太郎、鍛冶屋と石屋、浦島太郎、因幡の白兔、かぐや姫、猿かに合戦、舌切り雀、ねずみの嫁入りなど。ほかの年度も、日本の祭りや郷土玩具、四季の草花や風景など、その造形表現の妙は余人の及ぶところではない。

芹沢銈介は自らの型染カレンダーのちに「型絵紙染暦」と名付け、また「絵暦」ともよんだ。『暦』というものは、人類が農耕をはじめた上古の時代に、太陽と月の運行や、季節の寒暖

などの関係を知り、その条理を暦という形で広く伝えたのであった。

アイルランドのケルズの書をはじめ、中世から近世にかけて世界では宗教书を中心に、多くの美麗な筆写本が作られたが、実用的な暦もまた筆写、銅版、木版などで広く頒布された。芹沢の彫大な工藝のコレクションの中にも海外の装飾写本や朝鮮の易本、日本の伊勢暦などがある。芹沢が四十年近くにわたる「絵暦」創作の過程で汲めども尽きぬ源泉を掘り当てたことを、あらためて思うのである。



筒描皿 ペリカン (1913年)

生誕二二〇年

バーナード・リーチ

— 生活をつくる眼と手 —

会期

九月一日(土)〜十一月二十五日(日)

会場

松下電工汐留ミュージアム
都営大江戸線「汐留駅」より徒歩一分
電話 〇三(五七七七)八六〇〇

熊余話

最近、新聞やテレビで、熊の出没が頻繁に伝えられているが、先に、町内の人家近くにも現れ屋敷を一巡した後、山に入ってしまったということで話題となった。

かつて、熊が人里に姿を見せたことなど余り聞かなかった気がするが、原因として、山に餌となる木の実が少なくなつたとか、入山者が捨てた残飯の味を覚えたとか、また、棲息圏を人間が侵しているとか、さまざま取り沙汰されている。

熊撃ちの名人たちの書いたものによると、人間に対する熊の警戒心や、嗅覚は鋭敏で、狩猟の場合は煙草は勿論のこと、整髪料や排泄物の匂いにいたるまで気づく必要があるという。このような人間嫌いの熊が、人家の周辺

加藤 勝衛

にまで出没するようになったことは全く意外なことである。

よく聞く話だが、「熊と出会ったら死んだふりをすればよい」ということがある。それは、慌てて大声を出したり、走り回ったりして、熊を興奮させないようにするための心がけのことであり、実際は話をおもしろくしたものであろうといわれている。

しかし、よほどの話になるが、近所のお婆さんたちが二人連れで山菜を採りに行き、子連れの熊に遭遇したので、とっさに死んだふりをし数時間後、熊が立ち去ってから一目散に逃げ帰ったということがあった。時と場合によつては死んだ真似をすることも、あながち話をおもしろおかしくする方便とは限らず、冷静沈着な行動は熊の被

害から身を護る手段として大切であるという示唆であろう。

熊との不意の遭遇を避けるためには、ラジオや鈴を鳴らしながら歩き、あらかじめ人間の存在に気づかせるべきであるともいわれる。

だが、こんなことがあった。岩見川上流で溪流釣りをしての帰り、林道を下つて来たたら、そんなに離れていない川の中州で、中型の熊がうろうろしていた。爆竹を持っていたので、これを鳴らしたらどんな反応を示すか試してみることにした。

その日は、ジープを運転していったので、いざとなれば、これで逃げ出すつもりであり恐怖心もなかった。何発か威勢のよい音をひびかせたが、熊は驚く気配もなく、こちらを見るでもなく、水に入つてみたり、一向気にしていない様子で、やがて川から上がり、林道を横切つて音もたてずに山中に消えていった。



太平山のすそ野を流れる岩見川

このように、周囲のことには全く無関心のような態度を見ると、鳴り物入りで歩くことも余り当てにはならないことのようにだが、あの熊に限つてのことであつたのだろうか。生まれて初めて出会つてみたあの呑気そうな熊は今ごろどうしているのだろうか、ときどき思うことがある。

◇
医薬品があまり開発されていないかつた昭和初期はまだ配置薬や、家伝薬に頼つていたものである。中でも熊の胆嚢は万病の特効薬といわれていたが、一般にはなかなか求めがたいものであつた。

だが、子どもの集落では、それが案外たやすく手に入ったものである。太平山麓の奥地の仁別は、熊が多く捕れた土地で、そこに、こちらから嫁いで行つた人がおつて、そのつてがあつたからである。

嫁いだ人の実家から、時として「今夜、熊の胆を分けるから欲しかったら来てくれ」という触れがまわつたものである。子どもであつた私も親に連れられてその場に行つたことがある。真正銘の熊の胆嚢であることの証として、巾着型に形を整えて乾燥させた黒っぽい物体が丸ごと置かれていた。それを世話役が、集まつた人々の前で

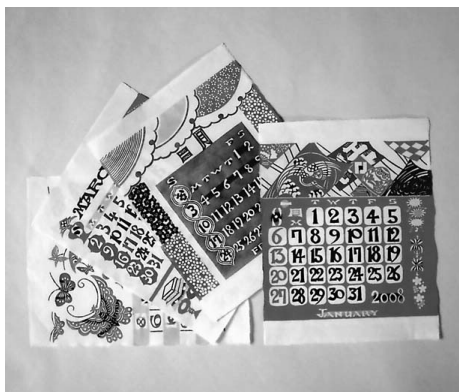
刃物を使い適当に切り、それを小さな秤に載せて計り売りするのである。何しろ胆嚢の重さと金の重さが同一であれば、価格も同一であるといわれた程の貴重品であるので、売る人も買う人も目つき、手つきは真剣であつたことが印象に残っている。

◇
例えようもなく苦いこの胆嚢の効力に預かつたことは一度や二度ではなかつた。

戦後、私の実家に阿仁町根子地区から薬売りが来て、年にひと晩か、ふた晩泊まつたものである。佐藤さんという背丈が高く、私よりも年長の青年であつた。根子地区はマタギの里、もちろん熊の胆嚢が目玉商品で、それらを背負つての行商であつた。

夜は炉端でマタギのこと、熊のことなど興味深い話を聞かせてくれたものであつた。

（『いわな文芸』編集発行人／秋田市）



型染めカレンダー 16,275 円(税込み)



卓上カレンダー 1,102 円(税込み)

たくみ歳時記

二〇〇八年

芹沢版カレンダー

民藝運動のなかで、芹沢銈介先生による型染めカレンダーほど、愛され、永く作りつづけられてきたものはありません。最初の一九四六年(昭和二一)年度版から一九八四年(昭和五九)までの自刻創作版と、一九八五年度からの

芹沢長介先生監修による複製版を通算して、実に六十二年の永きにわたります。

二〇〇八年度版も先日、型染、卓上のいずれも完成し、間もなく皆様にお届け出来るかと存じます。

今日では芹沢版型染めカレンダーに類似するものは内外ともにまったくありません。和紙に手染めの作品としても希少なものといえます。

あとがき

芹沢先生の型染めカレンダーは、戦後すぐの発売当初から欧米人の間で評判であったという。もとより宗教的、民族的な特徴のある祝祭、節日などない七曜表だから、どこの国の人たちにも受け入れやすかったのだろう。

初夏の頃、アイランド系アメリカ人のカトリック教会のシスターに、欧米では暦の制作に規範というものがあのか聞いてみた。すると全く気にしたこともないという。

欧米は宗教もカトリック、プロテスタント、英国国教会、東方正教会、ユダヤ教、イスラム教などあつて祝祭節日も異なるから予めの記入はないらしい。だが農耕行事中心のアジアでは、陰暦による独自の暦が今なお各地で生きつづけているようだ。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四一二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇一―三三五六五九

定価 六〇円(税込)